

北国の春

松本祥佳

もう20年になる。大きな病気で、死の淵をさまよい、命をとりとめた冬。ささやかなクリスマス会が病棟で開かれた。小春日和の午後、小さなコンビニのショートケーキをいただいてクリスマスを祝った。

この会で歌を歌うことになり、北国の春をうたった。なぜかわからないが病の間ずっと心に寄り添い、耳元で流れ続けた祖父の愛唱歌。ランニング姿でビールを飲みながらテレビで流れる北国の春をくちずさんでいた幼い日。祖父の魂がここにいます。

マイク越しの声で車いすの老人たちの頭が起き上がっていった。ゆっくりとこちらを見つめてくれる。心が動いて手や足が動く。こんな風に伝わるのか。わからなかった何か降りてきた。

その夜、その会にはいなかった隣のベッドの偏屈なおばあさんが私の手元に一枚の画用紙を差し出した。

「北国の春、書いて」

ベッドに座りなおして黒マジックで歌詞を書いた。読みやすく、大きな字で。小さなこぶしの花のイラストを添えて渡した。受けとってプイッと背を向けた。

二か月が過ぎた。毎日必死でご飯を食べた。生きよう。言い聞かせた。二月、その年は大雪が二回降り、丸く雪が積もった。隣のおばあさんはまったくカーテンを開けない。息をつめて横になっている。家族も来ない。なかなか回復しないのか、別の病院に転院する話も出ていた。

ある日見まわりの看護婦さんが声をあげる。

「朝はカーテン開けましょう」

仕切りをあけると

「あら、何か読んでるの？北国の春、好きなの」

小さくうづくまった背中が丸い。しわしわの手には黒マジックの画用紙が握られていた。祖父からのこぶしの花。

数日後おばあさんは転院、私も一月後に退院した。あれから二〇年。何とか生きてこられた。仕事にも就いた。おばあさんとはもう二度と会わないだろうし、亡くなっているかもしれない。

花や何。画用紙のこぶしを今も心に。ふとあの時の丸い小さな背中がよぎる。